

備後國府跡

—推定地にかかる第4次調査概報—

1986

広島県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本概報は、昭和60（1985）年10月14日～11月16日にかけて府中市元町で実施した備後國府跡推定地の発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は広島県教育委員会が得た昭和60年度国庫補助金をもって広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は片山和哉・唐口勉三・伊藤実が、整理・報告書作成は片山が担当し、遺物写真は伊藤が撮影した。
- 4 本概報の執筆・編集は片山が行った。
- 5 トレンチには3桁の一連番号を付し、上1桁の数字は調査年次を表す。
- 6 遺構の表示記号は、井戸：S E、溝：S D、ピット：S P、柱穴：P、その他：S Xとした。主な遺構については3桁の一連番号を付し、上1桁の数字は調査年次を表す。
- 7 本概報第1図の地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（府中・井原）を使用した。
- 8 本概報に使用した方位はすべて磁北である。

目　　次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(2)
III	調査の概要	(4)
IV	遺構と遺物	(6)
V	まとめ	(8)

図 版 目 次

図版 1	a 調査区遺景（南から）	図版 5	出土遺物 1
	b 調査区近景（北西から）砂山地区	図版 6	出土遺物 2
	c 調査区近景（北から）ワキ地区	図版 7	出土遺物 3
図版 2	a 401T 遺構状況（北西から）	図版 8	出土遺物 4
	b S E 401遺物出土状況 中層	図版 9	出土遺物 5
	c S E 401遺物出土状況 下層 a		
図版 3	a S E 401遺物出土状況 最下層		
	b S E 401掘方断面		
図版 4	a 403T 遺構検出状況（南から）		
	b 402T 遺構検出状況（南から）		

挿 図 目 次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1:50,000)	(2)
第2図	昭和60年度調査トレンチ位置及び周辺地形図 (1:2,500)	(5)
第3図	401T 遺構実測図 (1:100)	(7)
第4図	S E 401実測図 (1:30)	(8)
第5図	403T 遺構実測図 (1:60)	(9)
第6図	404T 土層実測図 (1:80)	(9)
第7図	S E 401（中層）出土土器実測図 1 (1:3)	00
第8図	S E 401（上・中層）出土土器実測図 2 (1:3)	00
第9図	S E 401（下・最下層）出土土器実測図 3 (1:3)	02
第10図	S E 401（掘方）出土土器実測図 4 (1:3)	03
第11図	砂山地区出土土器実測図 1 (1:3)	04
第12図	砂山地区出土土器実測図 2 (1:3)	05
第13図	砂山地区出土土器実測図 3 (1:3)	06
第14図	砂山地区出土土器実測図 4 (1:3)	06
第15図	砂山地区出土瓦実測図 (1:4)	07
第16図	S E 401出土木製品実測図 1 (1:1)	08
第17図	S E 401出土木製品実測図 2 (1:4)	08
第18図	S E 401出土木製品実測図 3 (1:6)	09
第19図	砂山地区出土銅鏡実測図 (1:1)	09
第20図	砂山地区・ワキ地区出土土製品実測図 (1:2)	20
第21図	402T 遺構実測図 (1:80)	20
第22図	ワキ地区出土土器実測図 1 (1:3)	22
第23図	ワキ地区出土土器実測図 2 (1:3)	23
第24図	ワキ地区出土土器実測図 3 (1:3)	23

I はじめに

府中市は古くから備後国府の推定地として注目されてきた。文献では源順の編集によって10世紀に成立した『倭名類聚抄』に「国府在葦田郡」と記載されており、江戸時代後半頃からその所在地を探る研究が行われている。また地名・地形による歴史地理的考証や寺院跡等の関連遺跡・遺物による検討も進められてきたが、国府に直接関連する遺構は確認されないままであった。

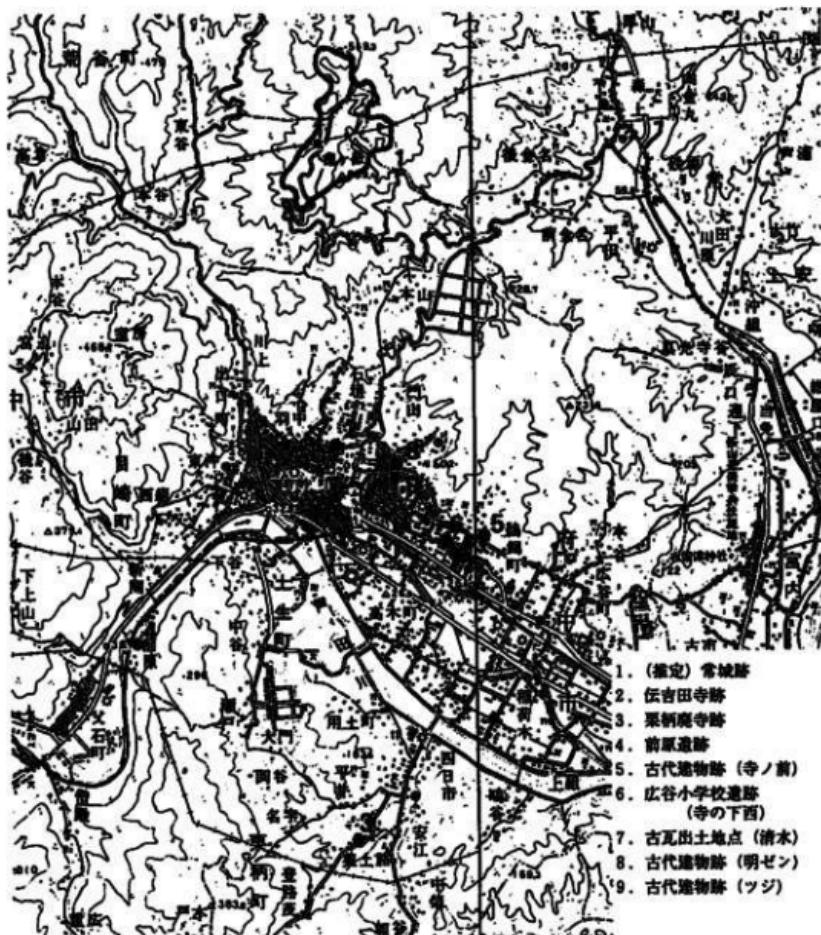
ところで、府中市は近年市街地が広がり続け、特に最近は宅地化が急速に進んでいる。そのため遺構の確認が難しくなってきたので、広島県教育委員会では昭和57（1982）年度から年次的に発掘調査を実施することになり、昭和57年度は広島県教育委員会文化課が、昭和58（1983）年度からは広島県立埋蔵文化財センターが調査を実施している。本年度は第4次発掘調査として、国庫補助金1,500千円、県費負担金1,500千円の計3,000千円をもって昭和60（1985）年10月14日～11月16日までの5週間にわたり、府中市元町で実施した。

なお、調査にあたっては地元の府中市、府中市教育委員会、元町史考会の方々の協力をうけた。特に広中久明・杉原英昭・清水容知・岡田伸弘（府中市教育委員会社会教育課）、高橋孝二（府中市市史編纂室）の各氏には調査全般にわたりお世話になった。また、松崎寿和・村上正名・潮見浩（広島県文化財保護審議会委員）、松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所）、岡本東三（文化庁）の各氏には調査にあたって指導・助言をうけた。さらに整理にあたっては藤田広幸・加藤和枝両氏の協力を得た。

また土地所有者である小川清・桑田八重子・住田司郎・門田元孝の各氏には調査の便宜を計っていただくなどの協力をうけた。記して関係各位に深く感謝の意を表する。

I 位置と環境

府中市は広島県東南部のやや内陸地帯に位置する。市域は吉備高原にあたる標高400～700mの山が大半を占めるが、市街地は平野部に位置し、平野部南方の丘陵地には、かつて氾濫を繰返した芦田川が流れる。



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 50,000 府中・井原)

昨年度に引き続き調査を実施した元町は市街地北西部に位置し、町を北から南へ流れる音無川で東西に分かれている。音無川周辺の地割りは他の市街地が磁北から東に約30° 傾しているのに対して、ほぼ南北方位をとっている。

周辺の遺跡を概観すると、芦田川南岸の丘陵には大久保遺跡のほか、弥生～古墳時代の集落跡が存在する。市街地周辺の丘陵上には昨年度から本年度にかけて調査された千原古墳をはじめ、寺山第1号古墳、城山古墳群、山ノ神古墳群、龍王山古墳群等の土塁・箱式石棺を内部主体とする古墳時代前半期の古墳が存在している。

古代の遺跡としては、府中市街地北方約3kmの急峻な山頂には、朝鮮式の古代山城である『続日本紀』に記載される常城跡の推定地が存在する。元町の西端には法起寺式伽藍配置を持つ伝吉田寺跡が、芦田川南岸の低丘陵が広がる栗柄町には栗柄廃寺跡が存在し、藤原宮式及び川原寺式の軒丸・軒平瓦が出土している。市街地から南西にはずれた父石町の狭小な谷部には寺院跡・駅館跡あるいは軍団跡と推定される前原遺跡が存在する。また奈良～平安時代の遺構としては鶴舎町の寺ノ前地区で倉庫跡と思われる掘立柱建物跡を、寺の下西地区で溝を検出し、元町の明ゼン・ツジ地区で官衙跡の可能性が考えられる掘立柱建物跡を検出している。

註

- (1) 豊元国「備後常城の調査」『奈良時代山城の研究』 府高学報 1968年。
- (2) 協坂光彦「備後國府成立の考古学的背景」『芸備』第12集 芸備友の会 1982年。
- (3) 広島県教育委員会『伝吉田寺発掘調査概報』 1968年。
- (4) 広島県立埋蔵文化財センター『備後國府跡』－推定地にかかる第2次調査概報－ 1984年。
- (5) 同 上
- (6) 広島県立埋蔵文化財センター『備後國府跡』－推定地にかかる第3次調査概報－ 1985年。

III 調査の概要

既往の調査

昭和55（1980）年10月には府川町の府中市文化センター建設予定地で、昭和57（1982）年6月には鶴飼町の広谷小学校プール建設地で広島県教育委員会が工事に先立ってそれぞれ試掘調査を行ったが、いずれも古代の遺構・遺物は検出できなかった。

昭和57（1982）年度からは国府の所在及び範囲確認を目的とした年次的な調査を開始した。第1次調査は広谷町・鶴飼町において実施し、遺構は検出できなかったが、鶴飼町の西田・コモ原・町田・下高田地区で、奈良～平安時代の遺物包含層を確認した。第2次調査は鶴飼町において実施し、寺の下西・広田・服部・寺ノ前地区で弥生～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。寺ノ前地区では柱穴掘方から円面鏡が出土した奈良～平安時代の掘立柱建物跡（SB204）を検出し、国府との関連が想定された。第3次調査は元町の音無川東側において実施し、明zen・ツジ地区で奈良～平安時代の掘立柱建物跡（SB301・302・304・305）を検出した。遺物も同時期のものが多量に出土したが、中でも縁釉陶器、陶鏡、青・白磁等が出土したため、同地域の遺構群は官衙跡の可能性が高くなった。

本年度の調査（第4次調査）

本年度は元町の音無川西側と東側を調査した。西側の砂山地区では401・403・404Tを設定した。401Tでは平安時代の井戸（SE401）等を検出し、SE401及び包含層から弥生時代～近世の遺物が出土した。特にSE401からは完形の須恵器のほか、木簡等が出土して注目された。403Tでは奈良～平安時代の柱穴と思われるピットや溝を検出し、弥生時代～中世の遺物が出土した。404Tは遺構は検出しなかったが、包含層から円面鏡等の奈良～平安時代のものを中心に弥生時代～中世の遺物が出土した。東側のワキ地区では昨年調査したツジ地区の南隣の水田に402Tを設定し、奈良～平安時代の溝や柱穴と思われるピット群を検出した。遺物は同時期の縁釉陶器、青・白磁のほか、弥生時代～中世のものが出土した。



第2図 昭和60年度 調査トレンチ位置及び周辺地形図 (1:2,500)

IV 遺構と遺物

1. 砂山地区

(1) 遺構（第3～6図）

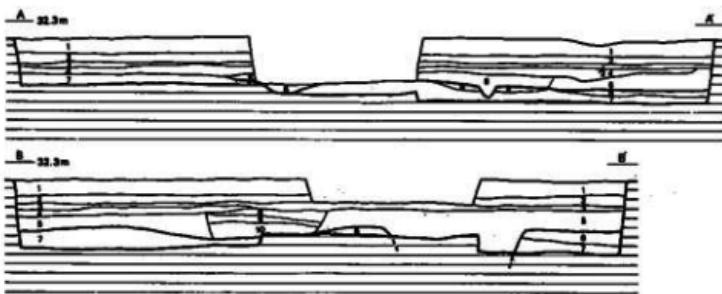
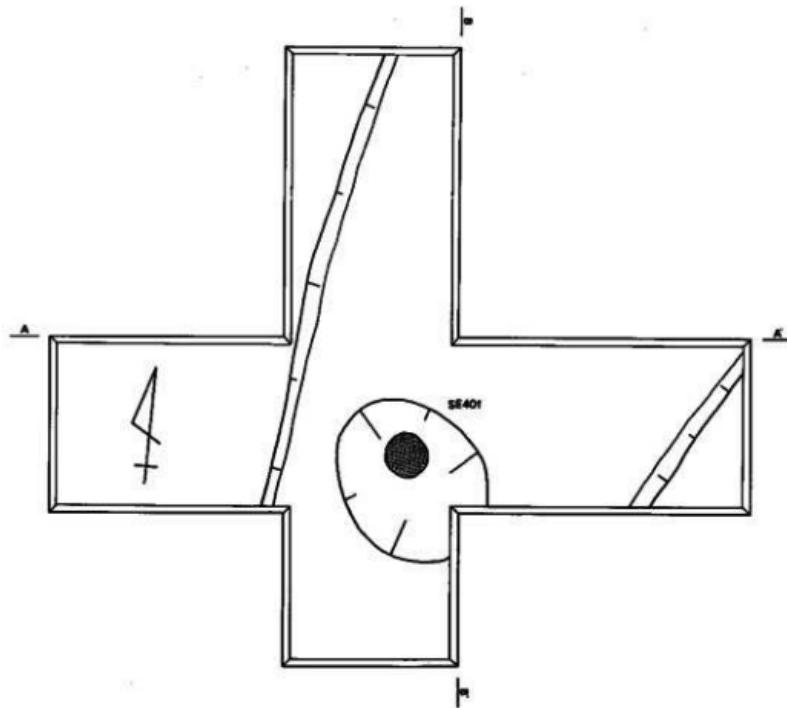
401T（第3・4図）

第3・4層下でトレーナーを南北に走る幅約6.5～8.0m、深さ約0.4mの溝を検出した。埋土は青灰色砂質土で古墳時代～中世の遺物を含んでおり、鏡片等が出土した。また溝の底面では井戸（SE401）を検出した。

SE401（第4図）

掘方は検出面での長径約3.1m、短径約2.4mの梢円形を呈し、深さ約1.1mで、下方へいくにしたがって狭くなり、約0.8mの地点で2段に掘下げられている。検出面では井戸の周囲に0.1～0.3m大の角礫が散乱しており、石組が存在した可能性もある。井戸枠（井側）はくりぬき型で、深さ約0.65m、厚さ0.1～0.15mの針葉樹をくりぬいた木材を3分割して、直径約0.65mのほぼ円形に組合せている。3箇所の接合部分はそれぞれ添板で補強されている。井側の最下端にはくりぬき材をささえよう、直径約0.07mの丸材を方形状に組んでいる。井戸底には井筒として、ほぼ中央に2段の曲物を据えている。上段の大きい方は直径約0.5m、深さ約0.3m、下段の小さい方は直径約0.4m、深さ約0.3mである。下段の曲物の上端は上段の曲物の下端に約0.15mはいり込み、入子の形をとっている。また上段の曲物の外面には補強のため、同一個体の瓦が割られて貼付けられている。

埋土は井側上端から深さ約0.1mまでは先述の溝で若干削平・攪乱を受けているが、褐色粘質土（上層）が、深さ約0.2mまでは灰色砂質土（中層）が、井側下端までは暗灰色粘質土（下層）が、曲物の部分には黒灰色粘質土（最下層）が堆積している。上層には完形に近い須恵器、土師器、瓦器が多量に出土した。中層は完形の須恵器、土師器のほか、布片が出土した。下層はさらに上からa・b・cに分けられ、aは土師器、黒色土器、瓦、土錐、下駄、木片、礫が、bは土師器、瓦、土錐、木簡、曲物片、木片、竹片、礫が出土した。cは土師器、瓦器が数片出土したが、礫が下方の曲物を覆うように堆積していた。最下層は土師器、瓦、木片、種子、礫が出土した。



1. 客土 6. 喀褐色粘質土
 2. 旧耕作土 7. 喀茶褐色土
 3. 旧床土 8. 淡褐色砂質土
 4. 茶褐色土 9. 褐色砂質土
 5. 青灰色砂質土 10. 淡茶褐色砂質土
 ※太線は溝の底面



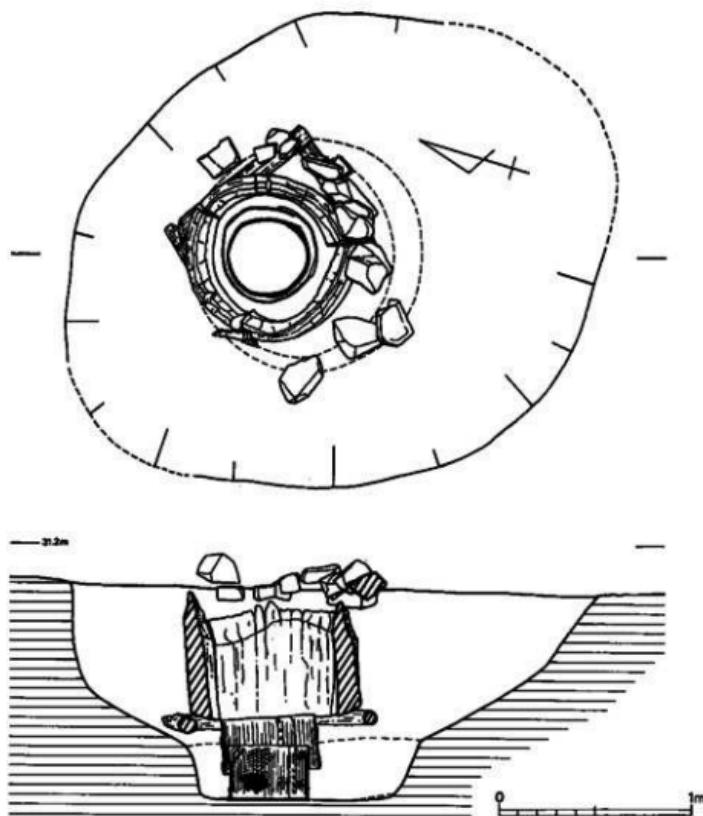
図 3 図 401 1 施用実例 (1. 100)

掘方埋土は2段掘の上段には粘質土（上層）、下段には砂質土（下層）が堆積しており、それぞれ須恵器、土師器、瓦等の細片が出土したほか、上層からは白磁、軒丸瓦の瓦当が出土した。

403T（第5図）

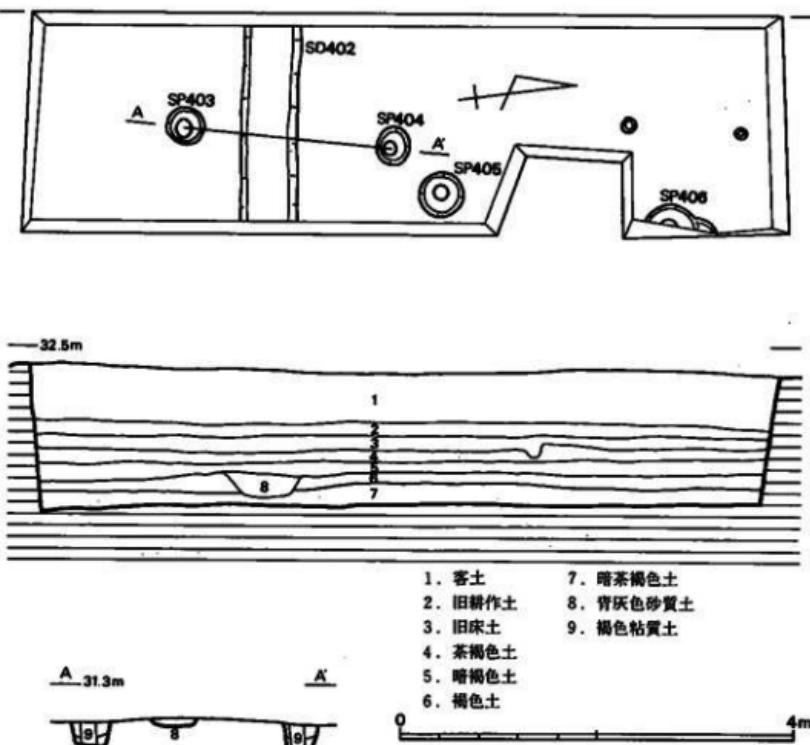
平安時代の溝（S D402）、ピット（S P403～406）等を検出し、遺物は包含層（第4～7層）から弥生土器、土師器、須恵器、瓦、羽口等が出土した。

SD402（第5図）

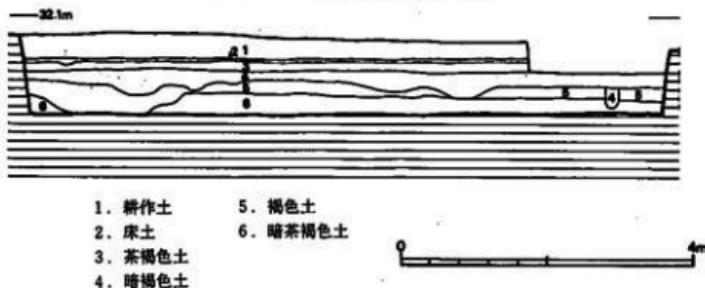


第4図 S E 401 実測図 (1:30)

トレンチのやや南寄りを東西に走る溝で、第6層を掘込んでいる。検出面での幅約0.5m、深さ約0.1mである。



第5図 403T 造構実測図 (1:60)



第6図 404T 土層実測図 (1:80)

SP403～406（第5図）

第7層を掘込んだ柱穴で、検出面での掘方は、直径約0.4～0.5m、深さ約0.25m、柱痕跡の径約0.15mである。埋土は掘方が淡褐色～褐色土、柱痕跡がやや暗い褐色である。またSP403とSP404は同一の建物の柱穴となる可能性が高い。

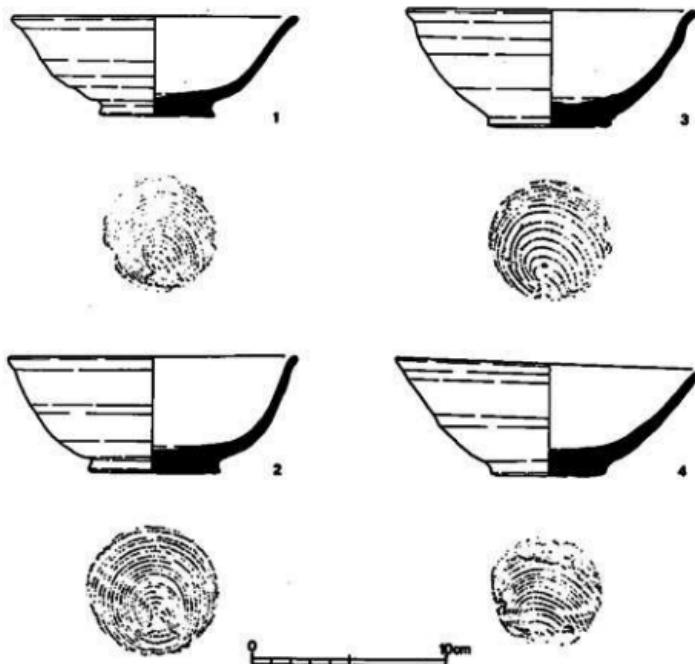
404T（第6図）

遺構は検出できなかったが、包含層（第3～6層）から弥生土器、土師器、須恵器、黑色土器、瓦等が出土した。

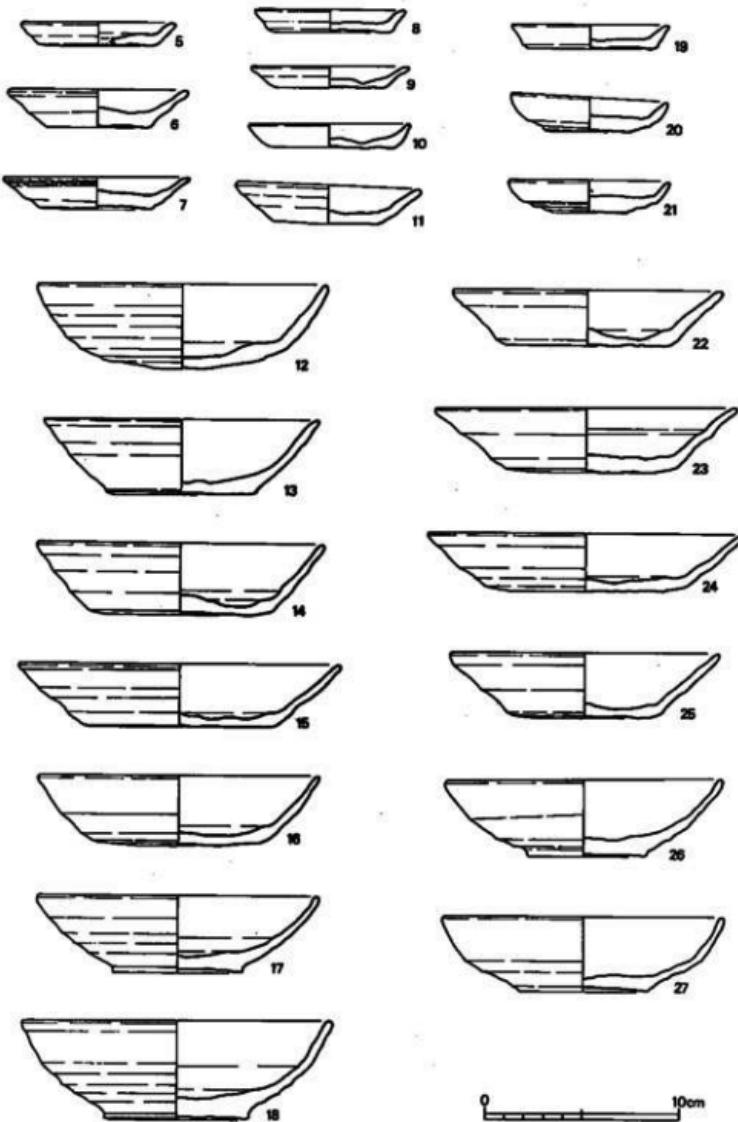
（2）遺物（第7～20図）

SE401出土土器（第7～10図）

1～4は中層出土の完形の須恵器の杯で、マキアゲ・ミズヒキ成形である。底部は



第7図 SE 401（中層）出土土器実測図1（1:3）

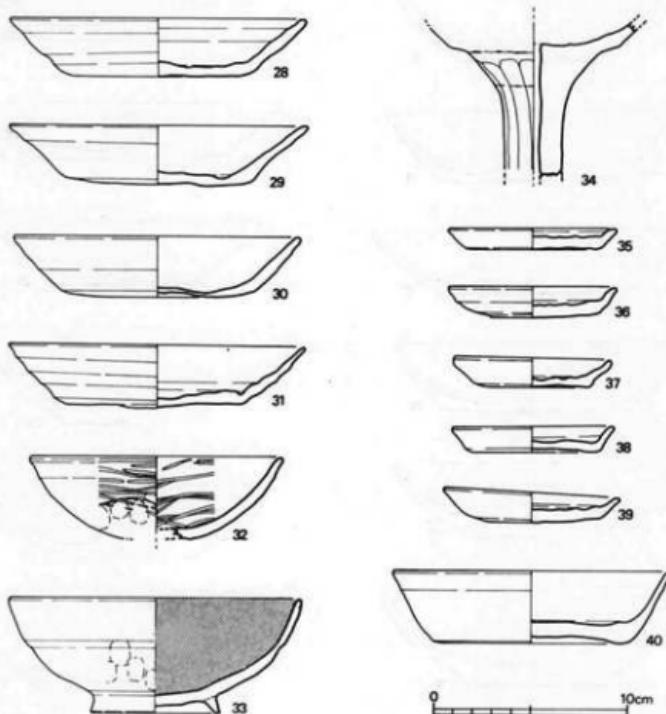


第8圖 SE 401(上・中層)出土土器実測図2 (1:3)

突出した回転糸切りの平高台で、体部は1～3が内湾気味に、4が直線的に立上がり、口縁部はやや外反して端部は丸くおわる。マキアゲの痕跡が残り、見込み部はやや凹む。焼成は4を除いて良好で、1～3が灰色、4が灰褐色を呈する。

以下出土数の多い土師器の杯、皿（5～32・35～40）については、器形によってI～VIIに分け、さらに底部の切離しの違いでI・IVをそれぞれ1・2に分けることとする。I・IIが小皿、III～VIIが杯である。

I 平坦な底部から体部が直線的に短くのび、口縁端部は丸くおわる。底部が回転ヘラ切りのものをI-1、回転糸切りのものをI-2とする。またI-1、I-2とも体部が短いものと、やや長いものとがある。焼成はあまいものが多く、淡褐色～灰褐色を呈する。I-1は上～最下層から、I-2は上～下層から出土し、図示したもの



第9図 SE 401(下・最下層) 出土土器実測図3 (1:3)
※ アミ目は炭素吸着部分

は I-1 : 上層 - 5~7、下層 b - 35・36、下層 c - 37、最下層 - 39、I-2 : 上層 - 8~11、中層 - 19、下層 c - 38 である。

Ⅱ 回転糸切りの底部から体部が内湾気味に短くのび、口縁端部は丸くおわる。焼成はややあまく、黄灰色を呈する。上・中層から出土し、図示したものは中層 - 20・21 である。

Ⅲ 丸味を帯びた底部から体部が内湾気味に立上がり、口縁端部は丸くおわる。底部は回転ヘラ切りで、焼成はややあまく、灰褐色を呈する。上層から 1 点 (12) 出土した。

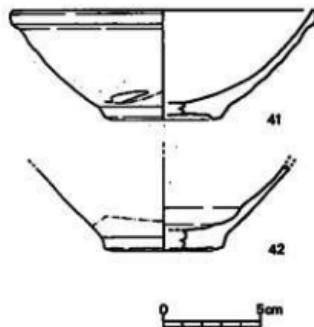
Ⅳ 平坦な底部から体部が直線的に立上がり、口縁端部は丸くおわる。底部が回転ヘラ切りのものを IV-1、回転糸切りのものを IV-2 とする。焼成はややあまいものもあるが、おおむね良好で、淡褐色～灰褐色を呈する。IV-1、IV-2 とも上～下層から出土し、図示したものは IV-1 : 上層 - 13~15、中層 - 22~24、下層 a - 28・29、IV-2 : 上層 - 16、中層 - 25、下層 a - 30、下層 b - 31 である。

Ⅴ 回転糸切りの底部から体部が内湾気味に立上がり、口縁端部は丸くおわる。焼成はややあまく、黄灰色を呈し、焼成・色調とも Ⅰ と酷似する。上・中層から出土し、図示したものは上層 - 17・18、中層 - 26・27 である。

Ⅵ 体部が内湾気味に立上がり、口縁部でわずかに外反し、端部は丸くおわる。内外面に圓錐状のヘラミガキが施され、外面には指頭圧痕が残り、底部に高台が付く。焼成は良好で、黄灰色を呈する。下層 c から 1 点 (32) 出土した。

Ⅶ 平坦な底部から体部が Ⅵ よりも直線的に立上がり、口縁端部は丸くおわる。底部は回転ヘラ切りで、焼成は良好、淡褐色を呈する。最下層から 1 点 (40) 出土した。

以上の土師器の杯・皿の他、下層 a から A 類の黒色土器碗 (33) が、下層 c から土師器の高杯 (34) が出土している。33は底部に「ハ」の字状に開く断面が台形の高台が付き、体部は内湾気味に立上がり、口縁端部は丸くおわ



第10図 SE 401(摺方)出土土器実測図 4 (1:3)

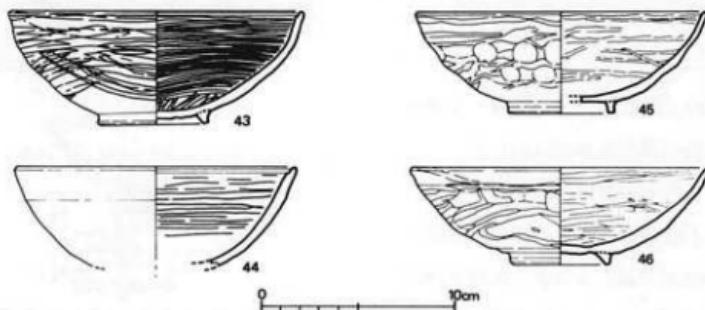
る。内面は黒灰色、外面は灰褐色を呈し、指頭圧痕が残る。焼成は良好である。34は脚部外面がヘラケズリによって12面とられ、脚の空洞には成形時の竹片が抜取られないので残っている。焼成は良好で淡褐色を呈する。掘方上層からは高台が浅く削出された白磁碗（41・42）が出土しており、体部は内湾気味に立上がり、41は玉縁状の口縁となる。42は見込み部が凹んで段が付き、重焼き痕跡が残る。体部下端以下を除いて灰白色の釉が付けかけされている。

瓦器（第11図）

43・44は捕葉型の碗で、口縁内端面に沈線がめぐる。43は断面が台形の高台が付き、ヘラミガキは見込み部がジグザグ状に、体部内面がレコード圓線状に、外面が全周を3回に分けてジグザグ状に施される。内外面とも炭素が吸着して黒色を呈し、焼成は良好である。44はヘラミガキが体部内面にレコード圓線状に施される。焼成はややあまく、灰色を呈する。45・46は和泉型の碗で、断面が方形～台形の高台が付く。体部内外面とも粗い横方向のヘラミガキが施されるが、外面は指頭圧による凹凸があり、ヘラミガキが途切れている。ヘラミガキ痕跡の幅は、43・44が約0.1cm、45・46が0.2～0.5cmである。（SE401：上層—45・46、下層c—43、403T：第5層—44）

須恵器（第12図）

47～58・60はマキアゲ・ミズヒキ成形、焼成はおおむね良好で、灰色～暗灰色を呈する。47・48は蓋で、47は偏平な擬宝珠状のつまみが付く。49～51は小皿で、底部は回転糸切りである。52～58は杯で、52が法量が小さく底部が回転糸切りのはかは、回転ヘラ切りの底部である。53・54は高台が付き、55～57は口径に比較して深く、マキアゲの痕跡が残る。58は口縁部が外反し、やや深い。59は灰釉陶器で、三日月高台が

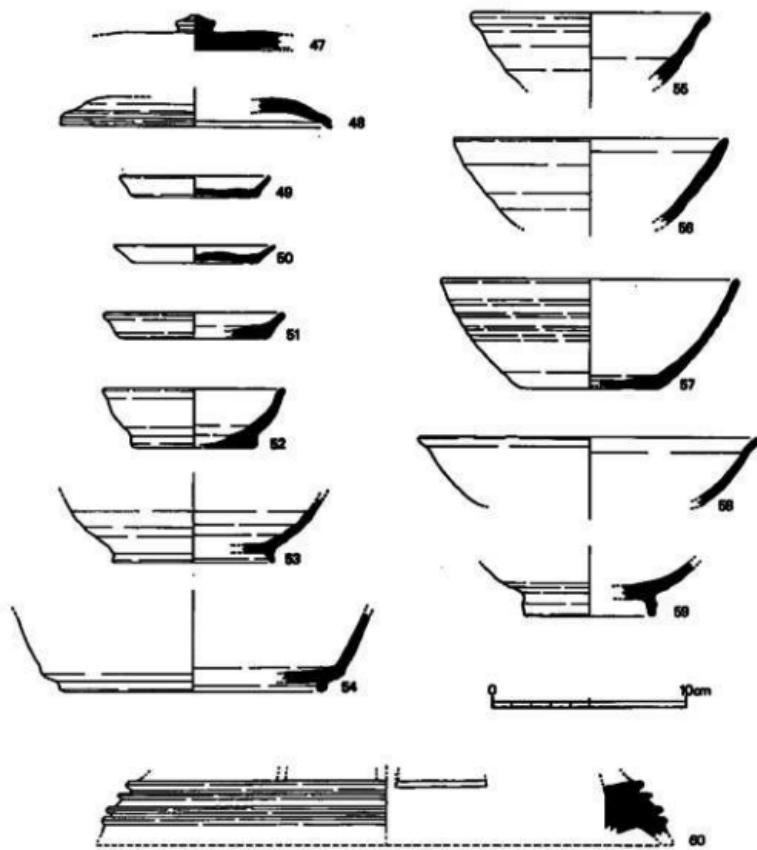


第11図 砂山地区出土土器実測図1 (1:3)

付く。体部は内外面とも灰釉を付けかけし、灰白色を呈する。底部及び重焼き痕跡の残る見込み部には施釉されていない。60は陶硯の一部で、円面硯の脚部と思われる。外面には4条の削出しの隆起帯がめぐり、長方形になると思われるヘラ切りの透しを有する。（403T：第3層—47・48・50・53・54、第4層—49・51、404T：第3層—55・59、第4層—52・56～58・60）

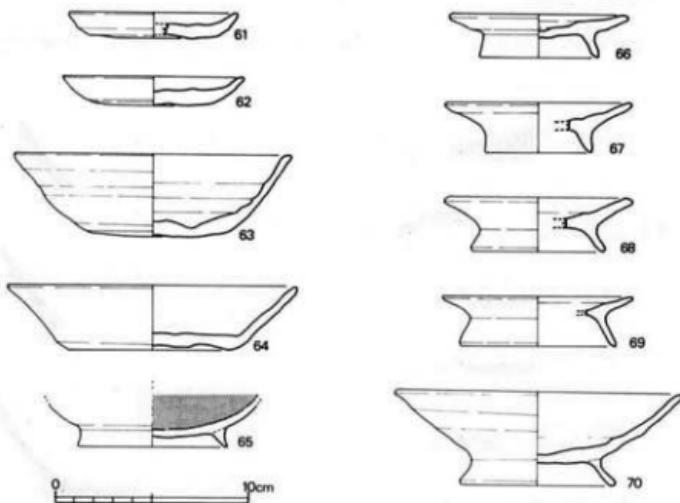
土器（第13・14図）

61～64・66～70は土器の杯・皿で、焼成はややあまく、淡褐色～淡橙褐色を呈す

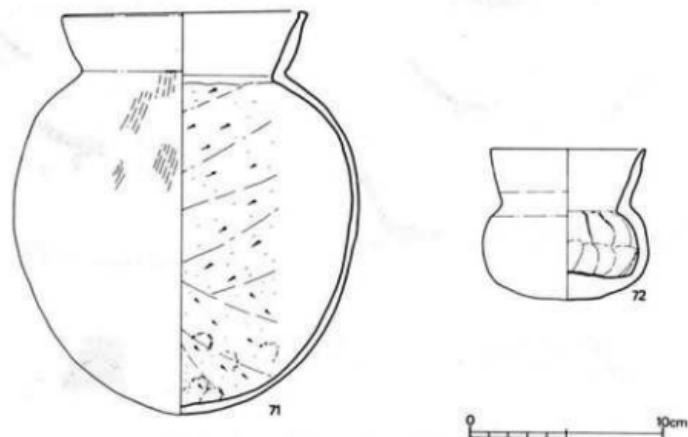


第12図 砂山地区出土土器実測図2 (1:3)

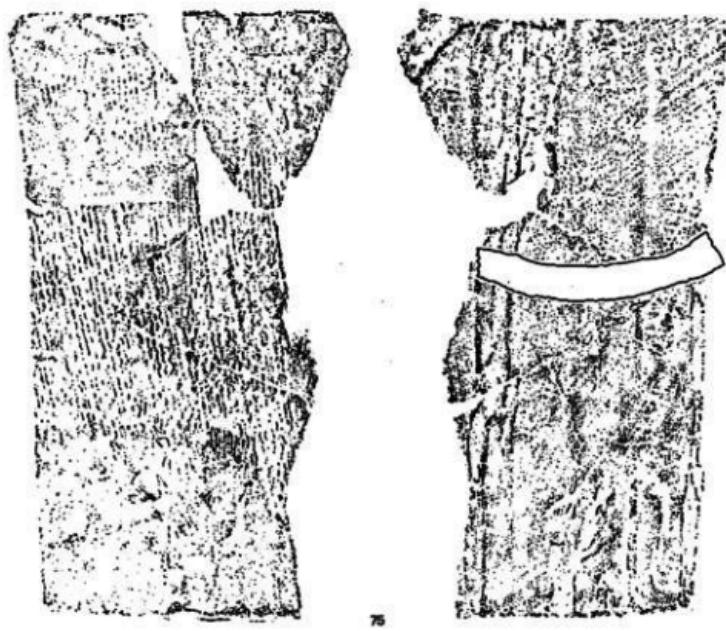
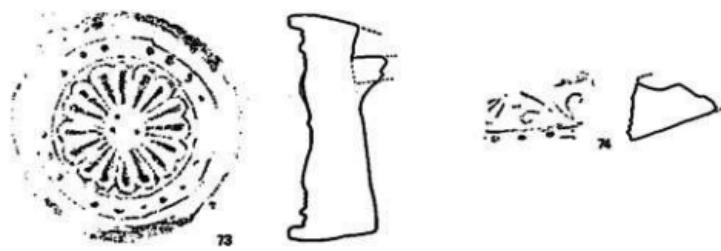
る。61・62はI-1、63はII、64はIV-1である。65はA類の黒色土器で、「ハ」の字状に開く断面が三角形の高台が付く。内面は炭素が吸着して黒色、外面は黄灰色を呈し、焼成は良好である。66～69は台付き小皿で、「ハ」の字状に開く高台が付き、皿部は偏平である。70は平坦な底部から体部がやや内湾気味にゆるやかに立上がり、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおわる。底部には外下方へ大きく開く細長い高



第13図 砂山地区出土土器実測図3 (1:3) ※ アミ目は炭素吸着部分



第14図 砂山地区出土土器実測図4 (1:3)



第15圖 砂山地區出土瓦實測圖 (1:4)

台が付く。(401T: 第5層—61~64、404T: 第3層—68~70、第4層—65~67)

71・72は401T 第7層出土の土師器で、焼成は良好、茶褐色を呈する。71は臺で、口縁部が直立気味に外上方へ開き、端部には平坦面を有し、内端面がわずかに突出する。頸部から胴部にかけてやや張出し、内湾して底部につづく。口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面がナデで、一部ハケ目が残る。内面は底部から3分の1程度まで指頭圧痕が残り、全体に下から斜上方のヘラケズリが施される。72は小型丸底盃で、口縁部が直立気味に外上方へ開き、先細りに尖っておわる。胴部は口縁よりもやや張出し、内湾して底部につづく。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面が粗いナデ、内面が指頭圧を加えた後粗くナデが施される。

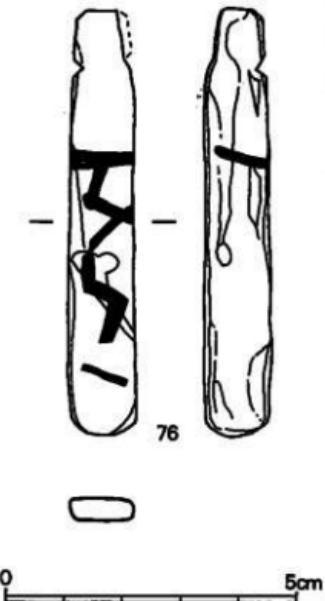
瓦(第15図)

73は複弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当面径は15.5cmである。内区は小さい中房に1+5の蓮子を配すと思われ、8葉の蓮弁は隆起帯の輪郭を持つ。外区は2本の圓線の間に20~22個の珠文がめぐる。74は均整あるいは偏行唐草文軒平瓦で、隆起線で区画される

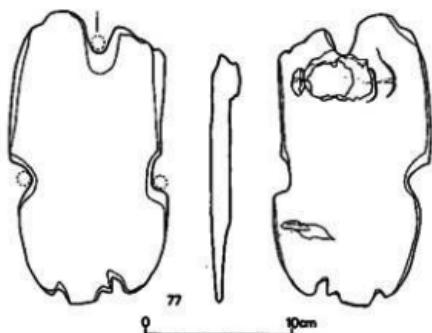
外区は連珠を有する。75は曲物の補強に使用されていた平瓦で、桶巻きづくりである。凹面は布目圧痕と横骨痕がみられ、凸面は繩タキが施される。外縁はヘラ切りである。(SE401掘方: 上層—73、下層—75、404T: 第4層—74)

SE401出土木製品(第16~18図)

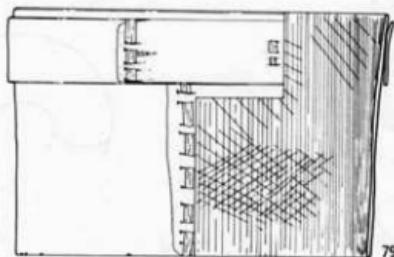
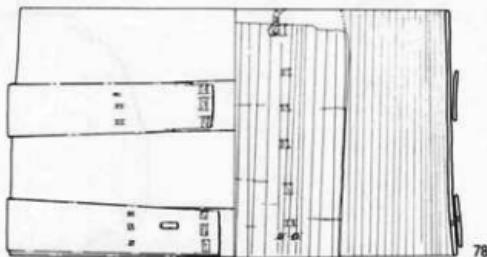
76は下層b出土の木筒である。上端から1.0cm



第16図 SE401出土木製品実測図1 (1:1)



第17図 SE401出土木製品実測図2 (1:4)

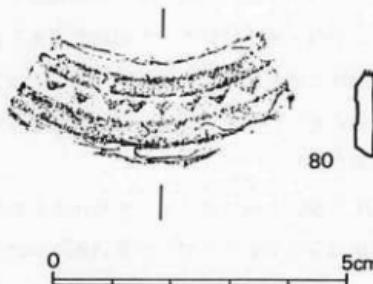


第18図 SE 401 出土木製品実測図3 (1:6)

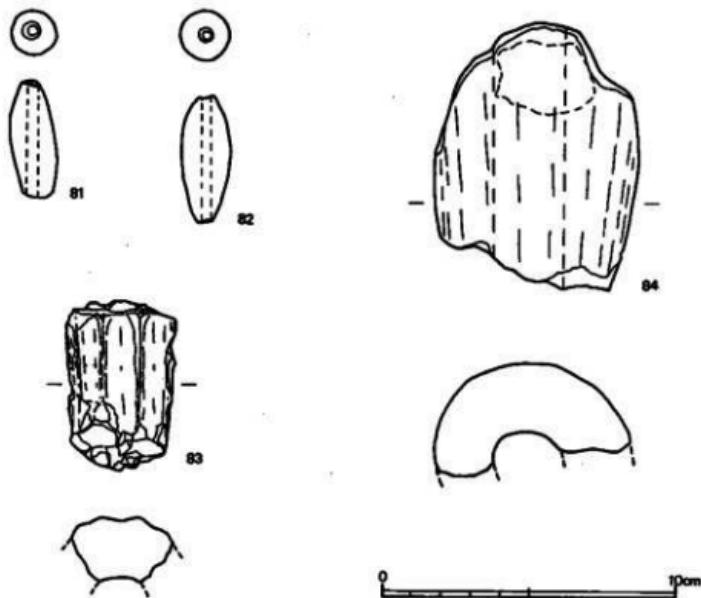
のところに両方からV字にき
ざみを入れており、下端の角
は削られて丸くなっている。
両面には3字と4字の文字が
書かれているが、判読はでき
ていない。

77は下層a出土の連歯下駄
である。腐食が著しく、調整
は不明で、歯・鼻緒孔は痕跡が残るだけである。

78・79はSE 401の井筒として使用されていた曲物である。78は上段の、79は下段の曲物で、針葉樹材の内側に78は木目と直交する方向に、79はさらに斜方向に刻目を



第19図 砂山地区出土銅鏡実測図 (1:1)



第20図 砂山地区・ワキ地区出土土製品実測図 (1:2)

いれて、78は左まわりに、79は右まわりに曲げ、木の皮でとじている。78は下端から約2cmのところに2個づつ対になった穿孔が4箇所、79は下端に穿孔が十数箇所あいていることから、底が付いていた痕跡と考えられる。78は中央やや上寄りと下端に左まわりに曲げたタガをはめており、79は下端は欠損しているが、上端のものは右まわりに、下端のものは左まわりに曲げたタガをはめている。

銅鏡（第19図）

80は401T検出の構（第5層）から出土した平縁の複波文を有する鏡の外区の部分で、推定鏡面径9.0cmの小型の獸帶鏡あるいは方格規矩鏡になると思われる。破面は研磨された痕跡はないが、破鏡として使用する意図があったと思われる。

土製品（第20図）

81・82は土錐で、81が8.7g、82が10.0gである。83・84は羽口の破片で、83は炉との接合部が黒くガラス状に溶融しており、断面は多角形状である。（S E 401下層：a—82、b—81、402T：第4層—83、403T：第4層—84）

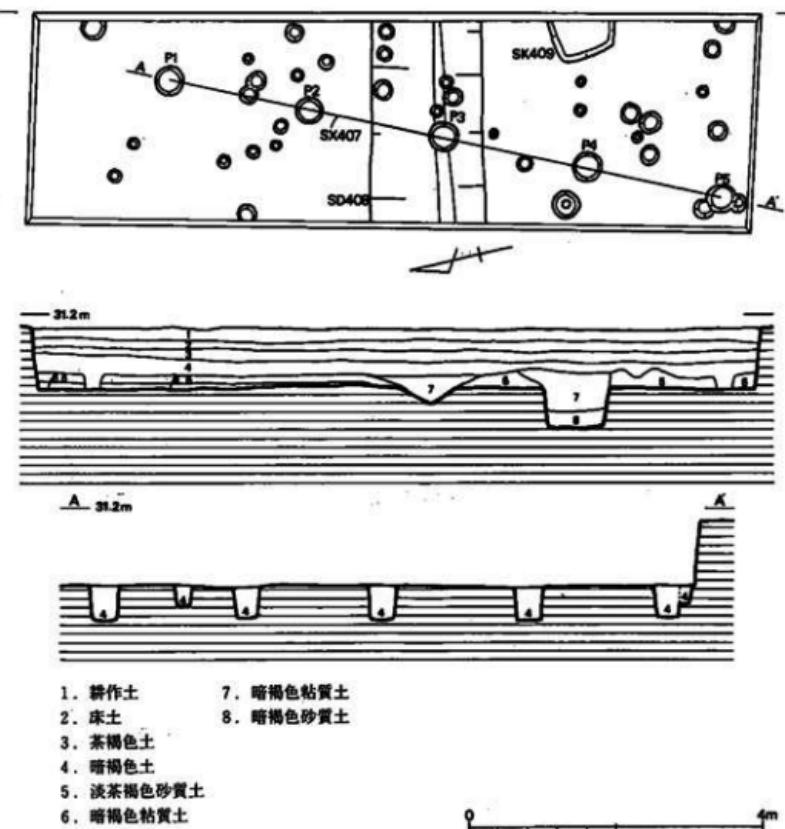
2. ワキ地区

(1) 遺構 (第21図)

402T (第21図)

奈良～平安時代の溝 (SD408)、土塙 (SK409)、ピット群等を検出した。遺物は包含層 (第3～6層) から弥生土器、土師器、須恵器、綠釉陶器、青・白磁、瓦、羽口等が出土した。

SX407 (第21図)



第21図 402T 遺構実測図 (1:80)

P 1～P 5 が一直線に並ぶ柱穴列で、第5層を掘込んでいる。直徑約0.4m、深さ約0.4～0.5m、柱間寸法は約1.9mである。埋土は暗褐色土が堆積している。柵列になるとと思われるが、建物になる可能性もある。

SD408 (第21図)

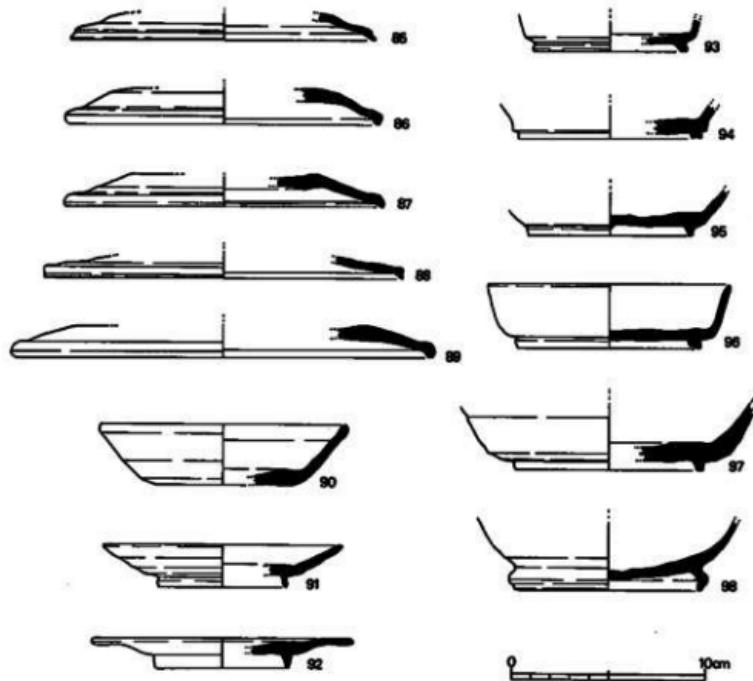
トレンチ中央を東西に走る溝で、第5層を掘込んでいる。検出面（トレンチ底）での幅約0.8m、深さ約0.3mである。埋土は暗褐色粘質土が堆積している。

SK409 (第21図)

トレンチ底で検出した一辺約0.8m、深さ約0.6mの隅丸方形の土壙であるが、性格は不明である。

その他（第21図）

その他のピット群は直徑約0.1～0.4m、深さ約0.2～0.4mで性格は不明であるが、根石や柱痕跡が残るものがあるので、小規模な建物が存在していたと考えられる。



第22図 ワキ地区出土土器実測図1 (1:3)

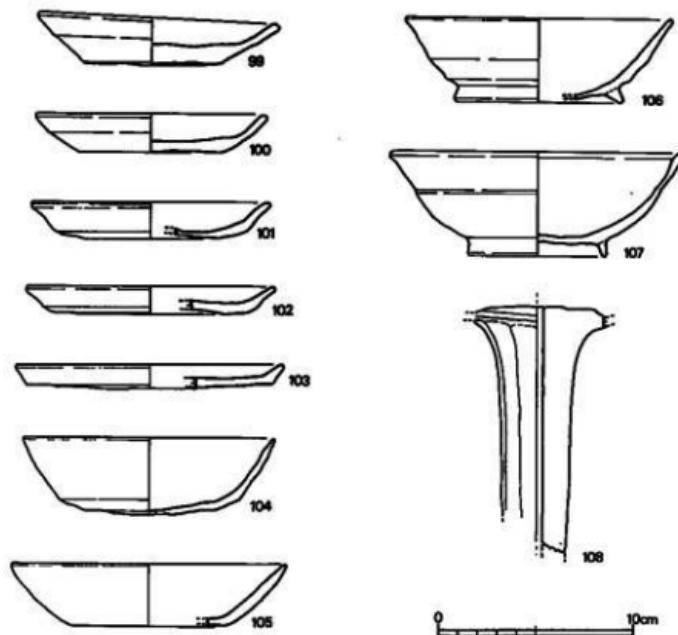
(2) 遺物 (第22~24図)

須恵器 (第22図)

85~98はマキアゲ・ミズヒキ成形、焼成はおおむね良好で、灰色~暗灰色を呈する。85~89は蓋で、口縁端部が尖るもの (85・88) と丸いもの (86・87・89) があるが、いずれも比較的偏平である。90は杯で、回転ヘラ切りの底部から体部が直線的に立上がり、口縁端部は丸くわわる。91・92は高台付の皿で、体部は91が直線的に、92が外反気味に立上がるが、偏平である。93~97は高台の付く杯で、高台の断面は方形~台形である。体部は直立気味のもの (93・96) と開き気味のもの (94・95・97) がある。98は三日月高台が付く碗であるが、釉はかかっていないものの、器形から灰釉陶器になる可能性がある。(402T : S D 408-96, 第4層-85~95・97・98)

土師器 (第23図)

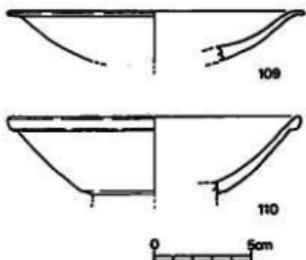
99~103は皿で、1~1よりも法量が大きく、回転ヘラ切りの平底から体部が99・100はやや長く、101~103は短くのびる。焼成は良好で淡褐色を呈する。104は皿で、



第23図 ワキ地区出土土器実測図2 (1:3)

焼成は良好で、淡褐色を呈する。105はIV-1で、焼成はあまく、淡橙褐色を呈する。106・107は高台が付き、106は体部が直線的に立上がり、口縁部は先細りで、端部は丸くおわる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。107は内湾して立上がり、口縁端部は玉状となる。焼成はあまく、黄灰色を呈する。108は高杯の脚部で、外面はヘラケズリによって9面をとっている。(402T:第4層-99・101~108、第5層-100)

青白磁(第24図)



第24図 ワキ地区出土土器実測図3 (1:3)

109は越州窯系の青磁の皿で、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は外反して、端部は丸くおわる。全体に施釉されていると思われ、淡緑色を呈し、胎土は精良である。110は白磁の碗で、体部は直線的に立上がり、口縁は小さい玉縁となっている。全体に施釉されていると思われ、灰白色を呈し、胎土は精良である。(402T:第4層-109・110)

V まとめ

本年度の調査は府中市街地北西部の元町で実施した。元町では昨年度調査した音無川東側の明ゼン・ツジ地区で、國府に関連すると思われる遺構・遺物を検出している。⁽¹⁾ 本年度調査したツジ地区南隣のワキ地区では建物跡は検出できなかったが、青・白磁、綠釉陶器等が出土し、國府が存在するとすれば、ツジ地区とともに中心部分になるであろう。また音無川西側の砂山地区では、井戸（SE 401）をはじめ、奈良～平安時代の遺構・遺物を検出し、直接國府に関連するかどうかははっきりしないが、同時期の遺構・遺物が濃密に存在する範囲が音無川西側にも広がっていることが確認できた。

以上のように本年度は遺構・遺物ともかなりの成果を得たが、ここでは、砂山地区401Tで検出したSE 401について若干の考察を行い、まとめとしたい。

SE 401 の所在する位置を地形的にみると、谷の出口にあたる。すなわち、市街地北方の丘陵から流れてきた音無川の扇状地になっており、地下には水脈が通っていると思われる。調査中には井戸の上端までの水位があり、現在も付近の民家では井戸を使用している。

SE 401 は丸太をくりぬいた井戸と2段に据えた曲物の3段構造となっている。丸太のくりぬき材は外側が外皮をはぎとっただけ、内側がくりぬいただけの未加工で使用されており、原材は直径1m近い針葉樹の大木であったと思われる。曲物はそれぞれ底が付いていた痕跡が残っているので、本来は容器として使用されていたものが井筒に転用されたと思われる。埋土中からは礫がかなり出土しているが、下層では井戸下端に曲物の上を覆うように堆積している。これは他層の出土状況とは明らかに異なり、むしろ浄水のため、礫を敷いていると言った方が適切であろう。また井筒の役目も取水、浄水のためのもので、2段に曲物が据えてあり、さらに礫を敷いてあることから、浄水に関してはかなりていねいに作られていると言えよう。

一般的にくりぬき型の井戸は奈良～平安時代に作られている。しかし井戸内及び掘方からは須恵器・土師器の杯・皿、瓦器・白磁の碗等の良好な遺物が出土しているので、他地域出土の遺物と比較しながら、さらにSE 401 の築造及び廢棄の時期を限定してみたい。

中層出土の須恵器の杯（1～4）はいわゆる東播系須恵器の最古のものと類似する。⁽²⁾ その特徴は突出した回転糸切りの平高台、見込み部が凹む点で、11世紀末に比定されている。1～4の方が器壁が厚く、やや時期的に古くなるかもしれないが、11世紀後半～末のものと考えてよいであろう。土師器の杯・皿は中層出土のⅡ（20・21）、V（17・18・26・27）がそれぞれ周防國府跡 S D104、S E122出土のものと、下層c出土のⅥ（32）が北九州市の愛宕遺跡147号土塙出土のものと酷似し、S D104が11・12世紀の境に、S E122が11世紀後半に、147号土塙が12世紀初頭に比定されている。上層出土の和泉型の瓦器碗（45・46）は尾上実氏の編年で12世紀前半に、下層c出土の楠葉型の瓦器碗（43）は橋本久和氏の編年⁽³⁾で12世紀初頭に比定されている。次に掘方上層出土の白磁碗（41・42）は横田賛次郎、森田勉氏の編年⁽⁴⁾で11世紀後半～12世紀初頭に比定されている。以上からS E401は11世紀後半～12世紀初頭に築造され、12世紀前半には廃棄されたと考えられ、あまり長い期間は使用されていなかったようである。また単独で検出したため、遺構の位置付け、国府との関連については不明である。しかし井戸は住居等の施設に付属するものなので、S E401の東約15mの403Tで検出したS P403～406等に関連するものかもしれない。

S E401からは100点を越える遺物が出土しており、擾乱を受けていると思われる上層を除く中層以下のものは、11世紀後半～12世紀初頭の一括遺物として把握できるものである。特に出土数の多い土師器の杯・皿は、備後南部における平安時代後半期の編年資料の一つとなるものであろう。

註

- (1) 広島県立埋蔵文化センター『備後国府跡』一推定地にかかる第3次調査概報— 1985年。
- (2) 神戸市教育委員会『昭和56年度神戸市文化財年報』 1983年。
- (3) 助府市教育委員会「周防國府跡昭和53年度発掘調査概報」『助府市文化財調査年報』 I 1979年。
- (4) 助府市教育委員会「周防國府跡昭和55年度発掘調査概報」『助府市文化財調査年報』 IV 1981年。
- (5) 佐藤浩司（元北九州市教育事業団）氏の御教示による。
- (6) 尾上実「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念 1983年。
- (7) 高柳市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』 1980年。
- (8) 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』 4 九州歴史資料館 1978年。

図 版

a 調査区遠景
(南から)



b 調査区近景
(北西から)



c 調査区近景
(北から)



ワキ地区

a 401 T 完掘状況
(北西から)



b S E 401
遺物出土状況

中層



c S E 401
遺物出土状況

下層 a





a S E 401 遺物出土状況 最下層



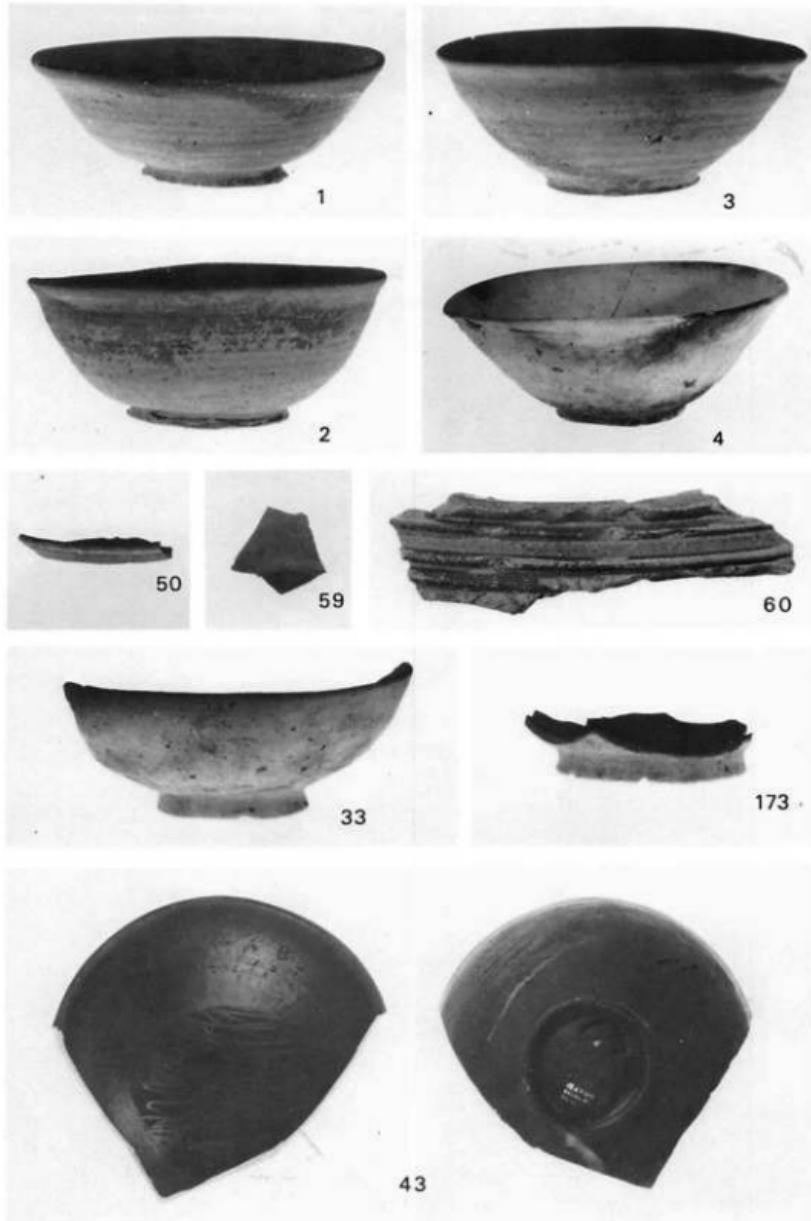
b S E 401 掘方断面

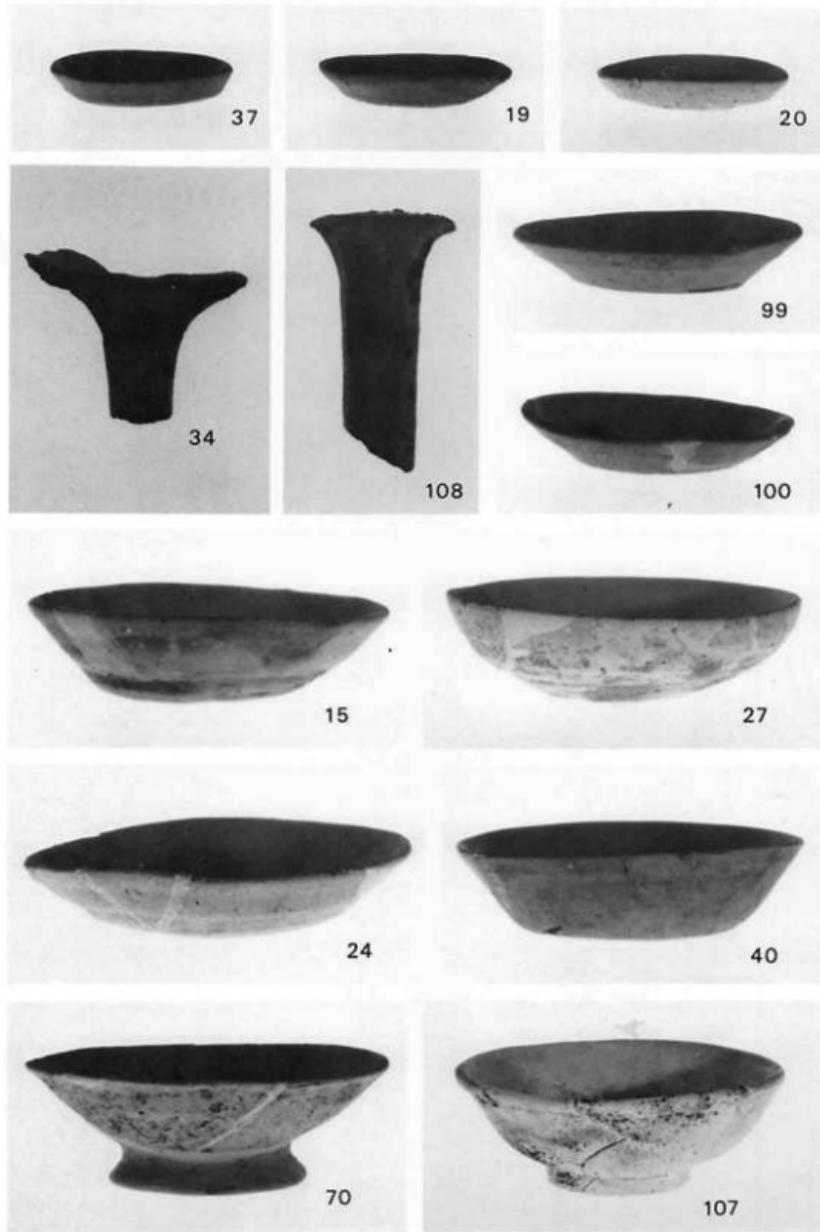


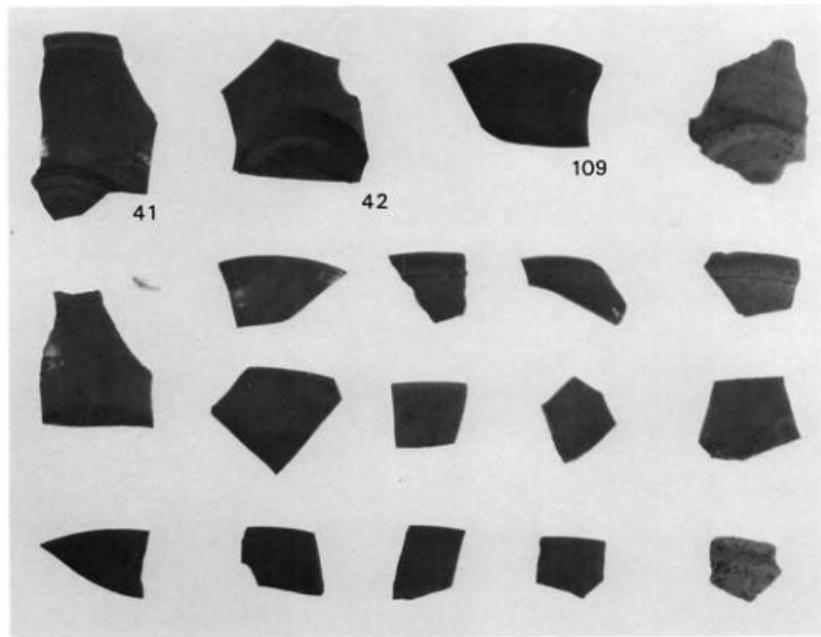
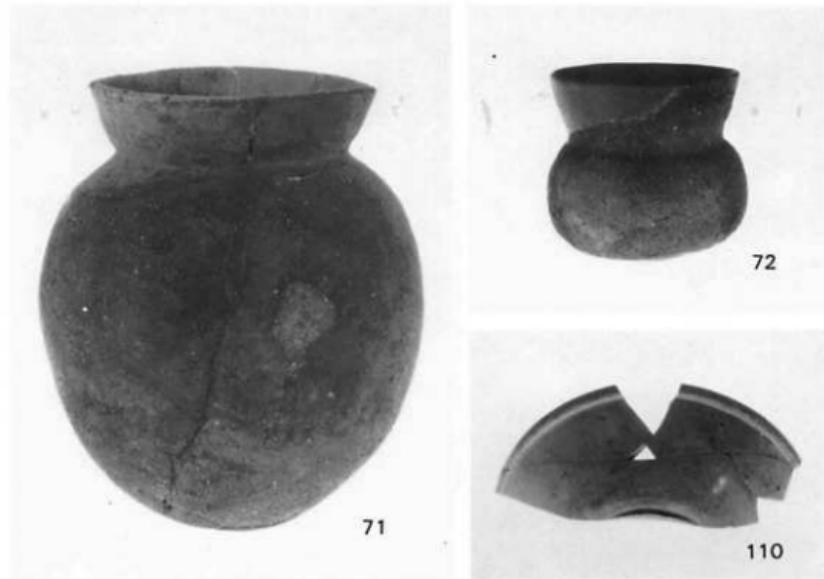
a 403 T 遺構検出状況（南から）



b 402 T 遺構検出状況（南から）

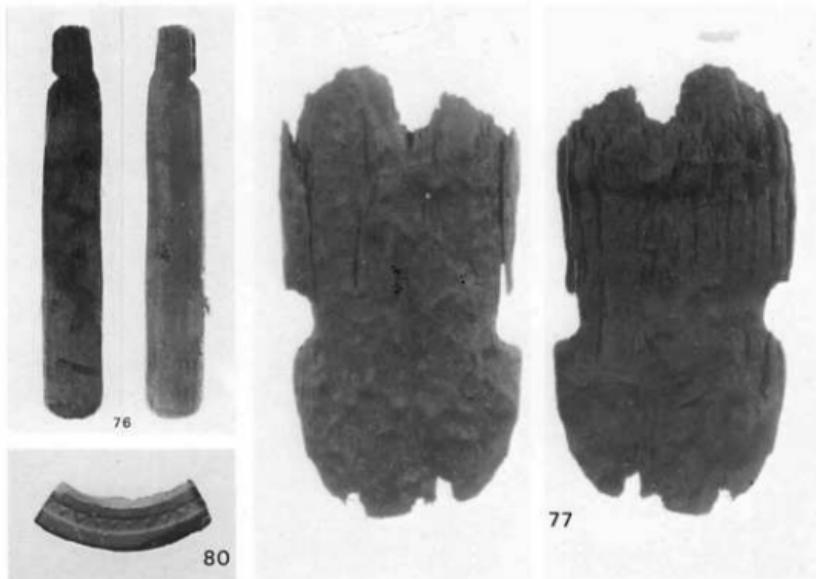






出土遺物 3





出土遺物 5

備後国府跡

—推定地にかかる第4次調査概報—

1986

昭和61年3月31日発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター

広島市西区緑香新町4-8-49

電話(082)295-5451

発行 広島県教育委員会

印刷 株式会社ニシキブンリト